

新屋の鹿嶋祭調査報告書

1 日 時 平成24年6月10日(日) 8:45~14:10

2 調査員 秋田市教育委員会文化振興室
安田室長補佐、進藤主査、井川主事

3 鹿嶋祭の由来

鹿嶋祭は、災厄^{さいやく}をもたらす悪霊を人形の中に封じ込めて、これを鹿島の地へ送り出す信仰行事で、東日本に広く分布する。

市内でみられる鹿嶋祭は、飾り付けた鹿嶋船に各家々で作った鹿嶋人形を乗せて、無病息災、悪疫退散、家内安全、交通安全、五穀豊穰など、疫^{えきりょう}霊・危難^{きなん}の厄払いや農作物の生育と豊穰を祈願したり、子どもたちの健やかな成長を人形に託して送り出す祭行事である。

市内の鹿嶋祭の起源は不明であるが、文献資料では『上肴町記録』(現大町一丁目)^(注1)の中で、延宝4年(1676)に武者人形を舟で港浜まで送り、沖まで出して流したことや、宝永7年(1710)に戸嶋町(現大町五丁目)で鹿嶋祭が行われていて、町々で祭がおびただしかったこと、さらに、『川口町丁代文書』(現旭南三丁目)^(注2)では、宝永2年(1705)に上川口、中川口、新町の3町(現旭南三丁目)で鹿嶋祭が行われたことなどの記録がみられる。なお、平成13年頃は市内では、9カ所^(注3)で鹿嶋祭が行われている。

4 新屋の鹿嶋祭

(1) 概要

新屋の鹿嶋祭の起源は不明であるが、『秋田県の年中行事I ぼんでんとかしま送り』^(注4)などによると、400年から350年前の江戸時代前期から中期に始まったと言われている。旧秋田藩主佐竹氏の領地である茨城県鹿島神宮を崇める鹿嶋信仰と端午の節句が結び付き、宵節句、露踏み、鹿嶋祭の3部構成となる独特の形態をとっている。かつては旧暦5月5日の端午の節句(新屋地区では月遅れの6月5日)に行われていたが、近年は6月の第2日曜日に行われている。



(2) 宵節句と露踏み

祭前日の宵節句には、子どもたちは菖蒲湯で身を清める。邪気を祓うため軒先に蓬や菖蒲を飾り、鹿嶋大明神の小幟を立てる。そして床の間に子どもたちの作った鹿嶋人形を飾り、笹巻きや柏餅を供え灯明をともして祈る。

祭りの早朝、子どもたちは露踏みを行い、無病息災、延命長寿を祈る。朝食後、鹿嶋人形に笹巻きを背負わせ、自分の息を3度吹きかけ、町内の鹿嶋船に届ける。

(3) 祭りの様子

今年の祭りは6月10日（日）に行われ、参加団体（町内）は新屋地区20町内会と栗田養護学校の合計21団体である。当番町は緑町町内会で、20町内会が1年ごとに交替で受け持つので、当番は20年に1度回ってくる。

日吉神社境内の正面の鳥居を入った左側に本部が置かれる。神社へ続く参道の階段下で、神社に向かって船の舳先状に紺・白色の幕が張られ中央奥に祭壇を設けてお祓いが行われる。祭壇の右側には笹巻きの出店があり、さらに右側では緑町町内会が記念写真（昭和54年から）を掲示している。



日吉神社境内



祭壇の設置状況

祭りは子どもたちが中心となって鹿嶋船を曳く。鹿嶋船は各町内を出発し、決められた時間に日吉神社へ行き、お祓いを受け地区を巡航して各町内に戻る。お祓いは午前9時30分、栗田養護学校の鹿嶋船を皮切りに、午後0時30分頃まで行われる。

午前8時50分、鳥居前交差点を西に渡った地点（コインランドリー前）で比内町が集合していた。比内町では、台車や船の骨組みは、毎年同じものを使っている。船は前日に組立て、上部にガジギの束を結びつけて船形を作る。当日の朝に町内の子どもたちが船に鹿嶋人形を乗せ、幟や風船で飾り付ける。午前9時に比内町の鹿嶋船が出発。町内などを回って、お祓いを受ける10～15分前には日吉神社へ到着する。

午前9時15分、栗田養護学校の鹿嶋船のお祓いが始まる。まず、鹿嶋船が鳥居を入れてすぐの場所に置かれ、子どもたちと補佐する大人たちが祭壇前に集



鹿嶋船（比内町）



子どもたちが鹿嶋船を曳く様子（比内町）

まる。神職の祝詞奏上の後、参加者のお祓いが行われ、代表者に合わせ拍手を打ち、拝礼する。その後、鹿嶋船のお祓いが行われる。船の舳先（親柱）に御幣を刺し、船に御神酒をかける。最後に神職がお祓いをする。以上がお祓いの神事で、所要時間は5、6分である。お祓いの様子を調査した5、6町内のうち、一度口に含んだ御神酒を船に吹きかけていたのは栗田養護学校だけで他の町内会は瓶から直接船にかけていた。



お祓いの様子（中表町）



御神酒を船にかける様子
（栗田養護学校）

鹿嶋船の行列は、鹿嶋大明神と書かれた幟を持った先導役を先頭に、柳の枝（カエデの枝の町内もある）を持った子ども、鹿嶋さんの歌の先導役を務める人、2本の引き綱で曳かれる鹿嶋船の順番となり、鹿嶋船を曳くときは、鹿嶋さんの歌が歌われる。歌詞は、「ショッ ショッ ショ 鹿嶋の送りしよ、ショッ ショッ ショ 寺のかげまで送りましよ」となっており、かつて寺（天龍寺）のかげを雄物川が流れており、「雄物川に鹿嶋さんを送り、流しましよ」という意味である。



先導役（比内町）



鹿嶋船の行列（大川町）

鹿嶋船は、日吉神社でお祓いを受け、各町内に戻ると解体される。南新町では、船の骨組み・荷馬車・お堂・帆・幕・吹き流しなどは倉庫に保管し、次の年も使用する。お堂は戦前からのもので、少なくとも80年以上使っている。見返し人形は毎年更新する。鹿嶋人形は、かつては雄物川に流していたが、現在は環境に配慮し流さずに廃棄する。これは、神社でお祓いを受けているので、流さなくても厄は祓われているということであった。他の町内会でも、現在は流しているところはないのではないか。午後、以前鹿嶋人形を流していた新屋町字新町後の雄物新橋のたもとに行ってみたが、流しに来た町内会はなかった。

鹿嶋船の解体が終わると各町内では直会が行われ、祭りは終了する。



鹿嶋船の解体の様子（南新町）

(4) 鹿嶋船について

鹿嶋船の形は各町内で細部に違いはあるものの、基本的には荷馬車に鹿嶋船を乗せて2本の引き綱で曳く構造になっている。鹿嶋船の骨組みは板や垂木で



鹿嶋船（北新町）



小型船を利用している
鹿嶋船（関町後）

船を利用している町内もある。船端の上部にガジギの束を横に帯状に結びつけ、これに繋げて舳先（親柱）もガジギで作られるが、上表町や中表町のように先端下部正面におかめの面が取り付けられている船もある。町内によっては、船

端上部のガジギに繋げて艫部分にガジギの舵を取り付けているところもある。これらのガジギは、浜田や豊岩地区で採取されるとのこと。船のほぼ中央にお堂が取り付けられ、中には数体の鹿嶋人形や船の模型が置かれる。船の中央部分には児童が作った数十



舳先に付けられた
おかめの面（上表町）



艫に舵が付けられた
鹿嶋船（関町）

体の鹿嶋人形が置かれ、艫側にも置いている町内がある。鹿嶋人形は、ベニヤ板や段ボールの台座に、胴部となる木や新聞紙を筒状にした棒が取り付けられ、針金の手足が付く。そして、胴部・手足に色紙や包装紙を用いた服が着せられる。頭部は紙粘土や詰め物を入れた布に顔が描かれ、折り紙の兜を被らせているほか、烏帽子をかぶった土



鹿嶋船中央に付けられた
お堂（中表町）

人形を使用している町内もある。人形には鹿嶋大明神と書かれた小旗や扇子などを持たせている。船端上部のガジギには旗が取り付けられる。旗は赤・青・黄・緑・紫のうち2、3色の紙を組み合わせ貼り合わせて作られ、紐で竹の棒に繋ぎそれをガジギの束に刺す。旗には「鹿嶋大明神」「交通安全」「家内安全」「家庭円満」などと書かれている。そして、多くの町内では風船と一緒に飾っている。船端上部のガジギの下には幕が張られ、荷馬車部分を覆い隠している。艫の下部（船外）には1～4個の太鼓を据え付け、鹿嶋さんの歌に合わせて演奏される。お堂の後または前には、「鹿



鹿嶋人形（愛宕町）



鹿嶋人形（南新町）

嶋

鹿嶋丸」と書かれた帆が立てられる。そして艫部分には見返し人形が飾られる。ほとんどの町内では、その年の流行や時代風刺を表現した自作のアニメキャラクターなどの人形などを飾っているが、愛宕町では鹿嶋人形を飾っており古い面影を留めている。



鹿嶋船の船端に付けられた旗と風船（南団地）



艫の下部に据えた太鼓を演奏する子ども（愛宕町）

愛宕町内会では、「見返しの鹿嶋人形は毎年製作している。ワラを編んで成形した武者に木製の面を付けている。面は汗かき地蔵のお堂の中にあっただもので、昔から伝わっているものを使っており、江戸時代からのものだと言われている。昔のままの鹿嶋人形を載せているのは愛宕町だけになってしまったが、伝統あるものなので、伝えていきたいと思って続けている。」ということであった。



愛宕町の見返しの鹿嶋人形

5 まとめ

新屋の鹿嶋祭は、子どもたちが中心となって鹿嶋人形の製作や前日の宵節句、当日早朝の露踏みなどの行事を行い、祭りでは鹿嶋さんの歌を歌いながら鹿嶋船を曳く。祭りは、子どもや地域住民の無病息災や厄を祓う信仰行事であるが、近年は子どもが減少しており、継続していくことに支障を来しているのが実情である。しかし、町内会が協力して鹿嶋船や鹿嶋人形の製作などを行っており、献身的な努力が感じられる。

そのような状況の中で、平成23年11月20日に各町内会の代表者が中心となって、新屋の伝統行事である「新屋鹿嶋祭」の調査研究、保存顕彰ならびに継承者の育成を目的に、「新屋鹿嶋祭保存会」が結成された。保存会ではかつての新屋鹿嶋祭の内容を調査し、大きく変わってしまった部分をできるだけ元の姿に戻し、後世に伝えて行くことを試みていくということである。

新屋の鹿嶋祭は、古くから鹿嶋信仰と端午の節句を結び付けた地域の特色ある民俗行事として保存継承されてきたものの、長い歴史の中で変化してしまった部分がある。それは、各町内で製作される見返し人形や鹿嶋船の製作方法、鹿嶋人形を流す行事などであり、今後の課題といえる。

これまで多くの方々によって守ってきた鹿嶋祭を確実に後世に伝えていくのが責務と考えているので、今後も新屋地域の宝物としてみんなが一体となって保存にご尽力願いたい。また、文献資料の調査や古写真などの記録も収集し、新屋の鹿嶋祭を本来の形に戻すなど、正しく継承していく必要があると考えている。

注1 『第二期 新秋田叢書(三) 上肴町記録』 新秋田叢書編集委員会 1973

注2 『久保田町記録集 川口丁代文書』 秋田姓氏家系研究会 1985

注3 川尻・檜山・新屋・新屋勝平地区・勝平保育所・川元小川町・川口新町・
広面字谷内佐渡・下新城笠岡

注4 『秋田県の年中行事Ⅰーぼんでんとかしま送りー』

秋田県文化財調査報告書第148集 秋田県教育委員会 1986

参考文献

『秋田の鹿嶋祭りー調査報告書ー』 秋田市立赤れんが郷土館 秋田市民俗芸能伝承館 1995